



Title	アリュートル語の名詞項標示
Author(s)	永山, ゆかり
Citation	北方言語研究, 4, 5-17
Issue Date	2014
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55101
Type	bulletin (article)
File Information	nls-4-02.pdf



[Instructions for use](#)

[特集 名詞項標示]

アリュートル語の名詞項標示

永山 ゆかり
(北海道大学)

1. はじめに

アリュートル語(北東シベリア、チュクチ・カムチャッカ語族)は能格・絶対格型の言語である。動詞の自他は語彙的に決まっており、それぞれ異なる種類の屈折接辞をとる。大部分の動詞は自動詞活用の接辞か他動詞活用の接辞かいずれかしかとることができず、通常は動詞の自他交替には何らかの形態的な操作が必要である。項標示は厳密であり、自動詞主語(S)ならびに他動詞目的語(O)が絶対格で、他動詞主語(A)が能格で現れる。この言語では、ある名詞項が目的語としてもちいられるときに、いくつかの異なる格標示をとることがないという意味では典型的なDOM言語ではない。しかし、同じ意味役割(動作の対象)を持つ名詞項に対し、他動詞文のO(絶対格)で表わすこともできるし、自動詞文の斜格(具格・処格・沿格)で表わすこともできるという点でDOM(Differential Object Marking)に通じる特徴をもつといえる。したがって典型的なDOM言語とこの言語を対比することは重要である。そこで本稿¹では、DOMの観点からアリュートル語の名詞項標示について記述と分析を行なうことを第一の目的とする。

さらに、アリュートル語には使役化や抱合といった形態上の操作なしに自動詞活用および他動詞活用のいずれの接辞もとりのう動詞がある。こうした動詞を本稿では自他両用動詞(Labile verbs)と呼ぶ。上述の自動詞文と同様に、自他両用動詞においても、同じ意味役割を持つ名詞項が他動詞文のOや自動詞文の斜格で表わされることがある。自他両用動詞における自他や名詞項標示の選択要因は、動詞の他動性や自他交替の問題と深く関わるものである。自動詞文における名詞項標示と比較しつつ、自他両用動詞について現時点で明らかになっている点を名詞項標示の観点からまとめることが本稿の第二の目的である。

以下、2節ではアリュートル語の自動詞文と他動詞文における基本的な名詞項標示について概観する。3節では他動詞や自動詞との相違点に注目しながら自他両用動詞の名詞項標示についてまとめる。4節では名詞項標示の選択に関する語用論的要因について考察し、5節で本稿のまとめを行なう。

¹ 本稿は言語ダイナミクス科学研究プロジェクト研究未開発言語調査派遣事業(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、科学研究費補助金(基盤研究B)「北東ユーラシア少数言語の電子アーカイブ環境構築とドキュメンテーション研究」(代表:長崎郁)、科学研究費補助金(基盤研究C)「消滅の危機に瀕する古アジア諸語の再活性化のための辞書編纂と語彙データベース構築」(代表:永山ゆかり)による調査の成果である。調査にあたっては次の話者の方々にアリュートル語に関する知識・資料を教授いただいた。ここにお名前を記して感謝の意を表す。Lidiia Innokentevna Chechulina (CLI), Mariia Nikiforovna Chechulina (CMN), Savelii Vasilevich Golikov (GSV), Tatiana Nikolaevna Golikova (GTN), Matrena Pavlovna Ivnaiko (IMP), Daria Andreevna Mulinaut (MDA), Vladimir Mikhailovich Nutayulgin (NVM), Daria Pavlovna Uvarova (UDP) (abc順、敬称略)。なお筆者のフィールド調査で得られた例文については、話者のイニシャル3文字を出典として示した。

2. アリュートル語の名詞項標示の概要

2.1 基本の名詞項標示

自動詞と他動詞では異なるセットの接辞を使うため、自動詞文と他動詞文の区別は明らかである。1節で述べたとおり、自動詞主語 (S) ならびに他動詞目的語 (O) は絶対格を、他動詞主語 (A) は能格をとる。ただし他動詞主語には複数の標示があり、人称代名詞 (能格専用の格を使う)、固有名 (処格と同形)、その他の名詞 (具格と同形) で使い分けられるが、Kibrik et al. (2004: 291) の基準にしがたい、本稿ではすべて能格と呼ぶ。Kibrik et al. (2003: 293-294) によれば能格は他動詞主語、道具、逆受動文における目的語を表わす機能がある。また Zhukova (1968:) は普通名詞の能格を *tvoritel'nyi (=ergativenyi) padezh* 「具格 (=能格)」と、人称代名詞の能格を単に *ergativenyi padezh* 「能格」と記述している。

例 (1) では自動詞「行く」に 3 人称単数の自動詞主語を表わす接尾辞が付加され、その主語である名詞「老婆」は絶対格をとっている。これに対し例 (2) では他動詞「出す」に 3 人称単数主語および 3 人称複数目的語を表わす接尾辞が付加され、その主語である固有名 *səŋa* (女性の名) が能格を、目的語である「子供」が絶対格をとっている。

- (1) *ənpəŋav* *telə* *awwav-i*
老婆 (ABS.SG) そこへ 行く -PFV.3SG.S
「老婆はそこへ行った」 (自動詞) (CMN)
- (2) *səŋa-nak* *ŋəruqməl* *jətu-nina* (...) *un'un'u-wwi*
PSN-ERG.SG 8 出す-3SG.A>3PL.O 子供-ABS.PL
「スナは子供を8人産んだ」 (他動詞) (CMN)

この言語では自動詞が主語と、他動詞は主語および目的語と一致して、動詞に S/A/O の人称と数が明示されるため、語順はかなり自由である。また主語や目的語を表わす名詞項は、文脈から明らかな場合は省略されることが多い。例 (3) では主語「鬼婆」が、例 (4) では主語「私」と目的語「おまえ」が省略されている。

- (3) *ləla-wwi* *jətu-nina*
目-ABS.PL 出す-3SG.A>3PL.O
「(鬼婆は死んだネズミから) 目玉をくり抜いた」 (CMN)
- (4) *usa* *q-ə-jat-ŋi=qi* *m-ə-piri-lqiv-ŋət*
さあ OPT.2SG.S-E-来る-2SG.S=EMP OPT.1SG.A-E-腕に抱える-INC-2SG.O
「さあおいで。(おまえを) 抱っこしてやろう」 (GTN)

2.2 動詞結合価を変更する操作

動詞の結合価の増減は形態的な操作によって行われる。結合価を増加する操作としては使役接辞の付加が、結合価を減少する操作としては逆受動接辞の付加と抱合がある。

自動詞の結合価は主に使役接辞 (接頭辞、接尾辞あるいはその両方) の付加によって増加する。以下に使役接頭辞の付加による結合価増加の例を示す。例 (6) の自動詞文では、

絶対格をとっている名詞項「老婆」が動詞の主語を表わすのに対し、使役接辞の付加により他動詞化した例 (7) では、絶対格をとる名詞項「娘」が目的語を表わしている。

- (5) kəjav-ə-k (vi) 「目覚める」 → t-ə-kjav-ə-k (vt) 「起こす」
- (6) to ənki jəqmitiv ənpəjav ya-kjav-lin
 そして そこで 朝 老婆 (ABS.SG) RES-起きる-RES.3SG.S
 「そして朝になり、老婆は目覚めた」 (IMP)
- (7) nural-a q-ə-n-ə-kjav-γən ɣavəkək
 早い-ADV OPT.2SG.A-E-CAUS²-起きる-2SG.A>3SG.O 娘.ABS.SG
 「早く娘を起こしなさい」 (CMN)

逆受動は接頭辞 ina-を他動詞語幹に付加することで表わされる。

- (8) akmit-ə-k (vt) 「つかむ、とる」 → in-akmit-ə-k (vi) 「つかむ、とる」

アリュートル語において逆受動は語用論的な要因により選択されるほか、統語上の要因により選択される場合もある (Kibrik et al. 2004: 313-314)。通常は他動詞語幹に逆受動の接頭辞 ina-を付加することで、動詞は自動詞化する。

- (9) tititav-nin kuka-jərʔ-ə-n to jəpa-nin
 煮る-3SG.A>3SG.P 鍋-中身-E-ABS.SG そして 取り出す-3SG.A>3SG.P
 「鍋の中身を煮立てて、取り出した」 (Kibrik et al.2004: Text11-6)
- (10) t-ə-ret-ə-tkən num qəlavul ya-mal-ina-nititav(-lin)
 1SG.S-E-帰宅する-E-IPFV また 夫.ABS.SG RES-良い-ANTI-煮る(-RES.3SG.S)
 (Kibrik et al.2004: Text33-21)

ただし、Kibrik et al. (2004: 312) が指摘しているとおおり、接頭辞 ina-の付加により必ず動詞の結合価が減少するとは限らず、逆受動の接頭辞を付加しても他動性を失わない動詞もある (11-13)。

- (11) pəŋlat-ə-k (vt) 「知らせる」 (他動詞) → ina-pəŋlat-ə-k (vt) 「招く」 (逆受動)
- (12) ənannə γəmmə ina-pəŋlat-i jat-γəŋ-ə-kjit əllaʔə-kin
 彼.ERG 私.ABS 1SG.O-知らせる-2SG.A 来る-NMLZ-E-CSL 母-E-POSS>3SG
 「彼は私に彼の母が来ることを知らせた」 (他動詞) (Kibrik et al. 2004: 492)
- (13) q-ə-ʕəŋav-γənawwi tumy-uwwi qun q-ina-pəŋlat-γəna
 OPT.2SG.A-E-呼ぶ-2SG.A>3PL.O 友人-ABS.PL さあ OPT.2SG.A-ANTI-招く-2SG.A>3PL.O
 「友人を呼べ、さあ (彼らを) 招け」 (逆受動・他動詞) (GTN)

さらに (14) のように、接頭辞 ina-が自動詞語幹に付加されていても自他両用となっている

² 使役接頭辞は位置によって異形態を使い分け、語頭で t-、語中で n-で現れる。

るものもある。ただし次の例では自動詞として使う場合と他動詞として使う場合では意味が違ふようである。

- (14) (t)kisi-k (vi) 「擦る」 → in³a-tkisi-k (vi/vt) 「(体や衣服が) 汚れる、塗る」
- (15) a-qiwwa-ka yəmmə t-in³atkisi-k
 ADV-ひどい-ADV 私.ABS 1SG.S-汚す-1SG.S.PFV
 「わあ、(自分の服などを) 汚しちゃった」 (CLI)
- (16) ...ənki lala-wwi yəjənʔa-ʔəvənʔ-a ya-mal-ʔ-in³atkisi-lan
 ...そこで 目-ABS.PL コケモモ-実-INS RES-良い-E-塗る-RES.3PL.O
 「そこで(ネズミたちはカラスの) 目をコケモモの実で(真っ赤に) 塗った」 (IMP)

O が抱合されると動詞の結合価が減少し、抱合によって得られた動詞は自動詞の屈折接辞をとる。以下の例で目的語「ブーツ」は (17a) では特定のブーツを、(17b) では不特定のブーツを表わす。なお、(17a) のような他動詞文では「母の」のような所有形を「ブーツ」の前に加えることができるが (17c)、(17b) のような抱合文では O の前に所有者を付加することはできない。

- (17) a. əllaʔ-a pəlak-u tavamjat-ə-tkə-nina
 母-ERG ブーツ-ABS.PL 揉む-E-IPFV-3SG.A>3PL.O
 「母が毛皮のブーツを揉んでいる」 (他動詞) (CLI)
- b. əlla pəlak-tavamjat-ə-tkən
 母.ABS.SG ブーツ-揉む-E-IPFV (3SG.S)
 「母が毛皮のブーツを揉んでいる」 (抱合) (CLI)
- c. əllaʔ-a ŋavakk-ina pəlak-u tavamjat-ə-tkə-nina.
 母-ERG 娘-POSS>3PL ブーツ-ABS.PL 揉む-E-IPFV-3SG.A>3PL.O
 「母が娘の毛皮のブーツを揉んでいる」 (所有+他動詞) (CLI)

2.3 抱合文における名詞項標示

抱合により結合価が減少したはずの他動詞が新たな O をとり、他動詞活用することがある。次の例 (18) では「ひげ」が抱合されているが、ひげの所有者である「犬」が目的語に昇格し、他動詞文となっている。「ひげ」が抱合されずに動詞の目的語として表わされる場合、所有者である「犬」は所有形で表わされる (19)。

- (18) un³un³u-ta ʔətʔ-ə-n na-lalu-yitəl³ʔat-ə-tkə-n
 子供-ERG 犬-E-ABS.SG INV-ひげ-引っ張る-E-IPFV-3SG.O
 「子供たちは犬をひげ引っ張りした (=犬のひげをひっぱった)」 (抱合・他動詞)
 (NVM)

³ 接頭辞 in³a-は接頭辞 ina-の異形態である。

- (19) un'unu-ta ʒətʃ-ina *lalu-wwi* na-yitəliʔat-ə-tkə-na
 子供-ERG 犬-POSS>3PL ひげ-ABS.PL INV-引っ張る-E-IPFV-3PL.O
 「子供たちは犬のひげを引っ張った」 (他動詞) (NVM)

さらに、抱合文では受益者を目的語としてとることもできる。次の例では母親が娘のためにブーツを揉んで柔らかくしてやるという状況で、受益者である「娘」が動詞の直接目的語として絶対格で表わされている。

- (20) əllaʔ-a *ɣavakək* pələk-tavamjat-ə-tkə-nin
 母-ERG 娘.ABS.SG ブーツ-揉む-E-IPFV-3SG.A>3SG.O
 「母が娘のために毛皮のブーツ揉みをしている (=毛皮のブーツを揉んでいる)」 (抱合・他動詞) (CLI)

2.4 自動詞文における名詞項標示

自動詞が O に相当する項を具格・処格でとることがある。たとえば自動詞 oji-「食べる」は目的語に相当する名詞を具格でとることができる (21)。対応する他動詞文では異根動詞 -nu-「食べる」の目的語が絶対格で表わされる。

- (21) *ənyam-a* oji-tkə
 うじ虫-INS 食べる-IPFV (3SG.S)
 「(小鳥は) うじ虫を食べる」 (自動詞文) (UDA)
- (22) ənnan ya-nu-lin *lawət*
 ひとつ RES-食べる-RES.3SG.O 頭.ABS.SG
 「(少女は魚の) 頭をひとつ食べた」 (他動詞文) (IMP)

また、「～のまわりをまわる」という自動詞は処格の名詞項をとることができる。以下の例はいずれも Kibrik et al. (2004: 421)による。

- (23) ɣəmmə t-ə-kamlil-ə-k *rara-k*
 私.ABS 1SG.S-E-まわりをまわる-E-1SG.S 家-LOC
 「私は家のまわりをまわった」 (自動詞)
- (24) ɣəmnan t-ə-n-kamlil-av-ə-n *rara-ɣa*
 私.ERG 1SG.A-E-CAUS-まわりをまわる-CAUS-E-3SG.O 家-ABS.SG
 「私は家のまわりをまわった」 (他動詞)

ほかに「食べさせる」、「贈り物をする」などの他動詞が、行為の受け手を絶対格で、すなわち直接目的語として、食べたものや贈られたものを表わす名詞を具格でとることができる。このような構造は、上で示したような自動詞文における意味上の目的語を具格で表わす構造とよく似ている。

- (25) *yəmnan t-ə-n-awəj-at-ə-tkə-na ramkəlʔ-u əvənʔ-a*
私.ERG 1SG.A-E-CAUS-食べる-CAUS-E-IPFV-3PL.O 客人-ABS.PL ベリー-INS
「私はお客さんにベリーを食べさせた」 (CLI)
- (26) *yəmnan t-ə-nqaviv-na ŋavramkəlʔ-u titi-ta*
私.ERG 1SG.A-E-贈る-3PL.O 女の客人-ABS.PL 針-INS
「私は女のお客さんに針を贈った」 (CLI)

3. 自他両用動詞

3.1 概要

本稿では Letuchiy (2009: 250-251) ほかの基準に従い、形態上の変化なしに自動詞としても他動詞としても用いられる動詞を自他両用動詞と呼ぶ。アリュートル語の自他両用動詞については Kibrik et al. (2004) および Mal'tseva (1998:217-219) に簡略な記述がある。

Mal'tseva (1998:217-219) では 34 の自他両用動詞⁴が、Kibrik et al. (2004) の辞書では 45 の自他両用動詞が紹介されているが、従来他動詞としてあるいは自動詞として記述されてきたものの中に自他両用動詞が多数含まれていることが明らかになってきた。筆者の調査では、現在のところ 65 の自他両用動詞があることが明らかになっている⁵。Kibrik et al. (2004) の辞書における動詞の内訳は次のとおりである。

- (27) 自動詞 809語 (60%) / 他動詞 501語 (37%) / 自他両用動詞 45語 (3%)

Kibrik et al. は自動詞用法において A が保持されるタイプの A-lability と P が保持されるタイプの P-lability があることを指摘しているが、用例を挙げるにとどまり、それ以上の分析は行っていない。そこで本稿では自他両用動詞の用法について現時点で明らかになっていることを名詞項標示の観点からまとめる。

まず自動詞用法と他動詞用法との主語の対応に着目すると、自他両用動詞は S=A 型と S=O 型の 2 種類に分けられる⁶ (Kibrik et al. 2000 の A-lability/P-lability に相当)。チュクチ語について指摘されているように分布には偏りがあり、アリュートル語でも自他両用動詞のうち S=A 型がおよそ 9 割、S=O 型はおよそ 1 割である。

(i) S=O 型の例

- (28) *kurək* 「来る・持ってくる」、*kukki* 「終わる・終える」、*ʕanqavək* 「やむ・やめる」、*ŋəvukki* 「始まる・始める」、*məlakki* 「壊れる・壊す」、*səŋatək* 「割れる・割る」

⁴ Mal'tseva (1998: 217-219) はアリュートル語の 4 方言について、一次語幹に限って 36 の自他両用動詞をあげている。そのうち本稿で扱うアリュートル語アリュートル方言と合致するのは 34 である。

⁵ これまで収集した動詞の自他については現在も調査中で、今後さらに増える可能性がある。

⁶ 同様の分類はチュクチ語について Nedjalkov (1987) および Dunn (1999: 208) が示している。Dunn はさらにチュクチ語で S=O 型は極めて少ないことを指摘している。

- (29) a. wajam imlat-ə-tkən
 川 (ABS.SG) 水浸しになる-E-IPFV (3SG.S)
 「川が水であふれている」 (自動詞用法)
- b. tumyən-ə-tək n-implal-la-mək muru
 仲間-E-ERG.PL INV-水浸しにする-PLUR-1PL.O 私たち.ABS.PL
 「隣人が私たち (の部屋) を水浸しにした (水漏れ事故などで)」 (他動詞用法)

(ii) S=A 型の例

- (30) ivək 「言う」、wintatak 「手伝う」、jenak 「出迎える」、tolik 「串焼きにする」、ʕirək
 「(川などを) 渡る」、emək 「水汲みする」、wəlpatkuk 「スコップで掘る」、pələtkek
 「終わる／終える」
- (31) a. qeɣun niɣvit-ʔənpəɣav maŋki valumtil-ə-tkə
 きっと 化け物-老婆 (ABS.SG) どこ 聞く -E-IPFV (3SG.S)
 「きっと鬼婆がどこかで聞いているよ」 (自動詞用法) (UDP)
- b. valumtil-ə-tkə-nina amamquti-nak
 聞く -E-IPFV-3SG.A>3PL.O PSN-ERG.SG
 「A男は (それらを) 聞いていた」 (他動詞用法) (MDA)

上の (13) にあげた動詞の他動詞用法で目的語となるのは次のとおりである。聞き手 (母が息子に言った)、手伝いをしてやる相手 (娘が母を助ける)、出迎える相手 (子供たちが父を出迎えた)、串焼きにする食材 (肉を串焼きにする)、渡る場所 (川を渡る)、水を入れる容器 (コップに水を汲んだ)、掘った穴 (スコップで穴を掘った)。

次に自他両用動詞を意味により分類することができるか検証する。Letuchiy (2010: 248) は、自他両用動詞の多くが、次のような意味特性を持つことを提示した。

- (32) a. destruction and strong property change
 b. motion/spatial configuration
 c. phase
 d. non-physical effect
 e. verbs with an animate patient

アリュートル語における自他両用動詞には、上記の a, b, c, e に合致するものがある。

- (33) a. səɣatak 「割る／割れる」、məlakki 「壊す／壊れる」、talʕak 「潰す／潰れる」
 b. təmlək 「近づく」、yalak 「～を通る」、imtik 「肩に担ぐ」、ʕirək 「(水を) 渡る」
 c. ɣəvu-kki 「始まる・始める」、pələtku-k 「終わる・終える」
 d. (=27e) valumtil-ə-k 「聞く」、iv-ə-k 「言う」、pəɣlu-k 「尋ねる」

ただしここに分類できないものも多数あり、おおまかな傾向はあるにしても、意味による分類が有効であるとは現時点では言えない。

また、Letuchiy (2009: 248-252) は 100 以上の言語の自他両用動詞を調査し、自他の意味対応のパターンを Anticausative, Reflexive, Reciprocal, Converse, Passive の 5 タイプに分類している。アリュートル語の自他両用動詞には、Letuchiy の分類中の、逆使役型（「壊れる／壊す」）および再帰型（「（自分の）髪を梳かす／（人の）髪を梳かす」）に加え、逆受動型（「肩に担ぐ／（～を）肩に担ぐ」「言う／（～に）言う」）とでも呼べるものがある。

3.2 自他両用動詞の名詞項標示

いくつかの S=A 型の自他両用動詞は、自動詞用法において O に相当する名詞項を具格・与格・処格・沿格のいずれかで示すことができる。どの格をとるかは名詞項の特性と関連しているが、いずれの名詞項も他動詞用法ではすべて絶対格で現れるという点は興味深い。この格と名詞項の特性との関連は、2.4 節で示した自動詞文の例と共通している。

3.2.1 具格標示

自動詞用法において O に相当する名詞項が具格で現れる場合、その名詞項は無生物名詞の中でも実体を持つ名詞に限られる。他動詞用法で O として現われうる「子供」は自動詞用法では具格で現われることができない。「子供」を担いだことを示す場合には「子供」を表わす語彙的接頭辞 *k-*⁷を用いる。

- (34) *yəmnan t-imti-na tavʃal-u*
私.ERG 1SG.A-肩に担ぐ-3PL.O 干し鮭-ABS.PL
「私は干し鮭を肩に担いだ」（他動詞用法）
- (35) *yəmmə t-imti-k tavʃal-a/*un'un'u-ta*
私.ABS 1SG.S-肩に担ぐ-1SG.S 干し鮭-INS/*子供-INS
「私は干し鮭／*子供を肩に担いだ」（自動詞用法＋具格）
- (36) *yəmmə t-ə-k-ʔimti-tkən*
私.ABS 1SG.S-E-子供-肩に担ぐ-1SG.S
「私は子供を肩に担いだ」（語彙的接辞／自動詞用法）

ほかに「魚をたき火で焼く」「薪を抱えて運ぶ」「ボールを蹴る」などがある。

3.2.2 与格標示

人を表わす O は自動詞用法において与格で現われうる⁸。

⁷ この接頭辞はアリュートル語と同系のコリヤーク語で子供を表わす名詞語幹 *kəmiŋ-* と関連があることは疑いないが、アリュートル語においては自立的な名詞として *kəmiŋ-* がもちいられることはないため、ここでは接頭辞として扱う。

⁸ 与格の O をとる動詞には「言う」「聞く」などがあり、動詞の意味が関連することが予想されるが、資料が少ないため現時点では断定できない。

- (37) a. əllaʔ-a iv-nin **akək**
 母-ERG 言う-3SG.A>3SG.P 息子.ABS.SG
 「母は息子に言った」 (他動詞)
- b. əlla iv-i **akka-ŋ**
 母.ABS.SG 言う-PFV.3SG.S 息子-DAT
 「母は息子に言った」 (自動詞+与格)

なお *ŋavən'n'u-k* 「(男が女に) 求婚する」は主語と目的語のほかに受益者をとることができる (38c)。この場合、受益者は与格で表わされる。

- (38) a. sanva-nak ŋavən'n'u-tkə-nin **amma**
 PSN-ERG.SG 求婚する-IPFV-3SG.A>3SG.O PSN.ABS.SG
 「S男はA子に求婚している」 (他動詞)
- b. sanva ŋavən'n'u-tkən **amma-naŋ**
 PSN.ABS.SG 求婚する-IPFV (3SG.S) PSN-DAT.SG
 「S男はA子に求婚している」 (自動詞+与格)
- c. sanva-nak ŋavən'n'u-tkə-nin **ləlqiwwət** nutarətil-naŋ
 PSN-ERG.SG 求婚する-IPFV-3SG.A>3SG.O PSN (ABS.SG) PSN-DAT.SG
 「S男はN男のためにL子に求婚している (L子を息子であるN男の嫁にしようとしている)」

3.2.3 処格・沿格標示

○が場所を表わす名詞であれば、自動詞用法で処格あるいは沿格で表わされる。次の例では他動詞用法においては絶対格をとるものが、処格あるいは沿格で表れている。

- (39) a. ɣəmnan t-ə-ŋir-ə-n **wajam**
 私.ERG 1SG.A-E-渡る-E-3SG.O 川 (ABS.SG)
 「私は川を渡った」 (他動詞)
- b. qajitʔəlʔ-ə-n əŋŋin ɣa-ŋir-lin **wajam-ə-k**
 PSN-E-ABS.SG それ>3SG RES-渡る-RES.3SG.S 川-E-LOC
 「Q子は川を渡った」 (自動詞+処格) (UDP)
- (40) a. ɣəmnan t-ə-ɣala-n **nəmjarʔ-ə-n**
 私.ERG 1SG.A-E-通りすぎる-3SG.O 村-E-ABS.SG
 「私は村を通りすぎた」 (他動詞)
- b. ɣəmmə t-ə-ɣala-k **nəmjarʔ-e**
 私.ABS 1SG.S-E-通りすぎる-1SG.S 村-PROL
 「私は村を通りすぎた」 (自動詞+沿格)

3.3 自動詞・他動詞と自他両用動詞

自動詞・他動詞と自他両用動詞を比較すると、形態上の操作の可否について明らかな差異がある。2.2 節で述べたとおり、自動詞は接辞付加による使役化が (41b)、他動詞は接辞付加による逆受動化 (42b) が可能である。また動詞によっては使役化で得られた他動詞 (43b) をさらに逆受動化することもできる (43c)。つまり自動詞および他動詞は形態上の操作による結合価の増減が比較的的自由に行われるとみてよい。ただし、逆受動化した動詞や、抱合によって得られた動詞にさらに使役化接辞を付加することはできない。

- (41) a. kəjav-ə-k (vi) 「起きる」
b. t-ə-kjav-ə-k (vt) 「起こす」
- (42) a. akmit-ə-k (vt) 「つかむ、とる」
b. in-akmit-ə-k (vi) 「つかむ、とる」
- (43) a. itit-ə-k (vi) 「沸騰する」
b. t-itit-av-ə-k (vt) 「沸騰させる」
c. ina-n-itit-av-ə-k (vi) 「沸騰させる」

これに対し自他両用動詞は使役化・逆受動化の接辞の付加による結合価の増減をしにくい⁹。この点で自他両用動詞は逆受動や抱合によって得られた動詞と共通している。また自他両用動詞が **O** を抱合している例がきわめて少ないことから、**O** の抱合もしにくいと予想される。つまり自他両用動詞の動詞結合価は語彙的に決まっているというよりは、**O** の有無により決定されるといえる。

次の例は「肩に担ぐ」という自他両用動詞が「プディング」という名詞を抱合し、さらに使役化接辞をとっているが、テキスト中で自他両用動詞が名詞を抱合している例はほかに見つかっていない。

- (44) ya-meŋ-ə-n-tilq-imti-v(-lin)
RES-大きい-E-CAUS-プディング-担ぐ-CAUS (-RES.3SG.S)
「(彼らは彼に) たくさんのプディングを担がせた」 (GTN)

一般に、逆受動や抱合については、**A** (能格) を **S** (絶対格) にすることで話し手の関心が **S** にあることを示すことが多くの研究で指摘されている (Sapir 1910, Mithun 1984 など)。アリュートル語の逆受動や抱合といった操作がこのような動機に基づいて行なわれるならば、自他両用動詞は、形態上の操作なしにそのまま **A** を **S** にできるので、多くの場合、逆受動化や名詞抱合といった操作を行なう必要がないのだと考えることができる。

⁹ これは Polinsky & Nedjalkov (1987) によるチュクチ語の自他両用動詞が逆受動化できないという指摘と合致する。ただし Kibrik et al. (2004) の用例からは使役化接辞の付加が可能な自他両用動詞も少数確認されている。

4. 名詞項標示の語用論的差異

ここでは名詞項標示の語用論的な差異に関して、逆受動を例に考察する。

アリュートル語と同系であるチュクチ語の逆受動について、Polinsky & Nedjalkov (1987: 241) は 1) 統語的要因、2) 語用論的要因、3) その他の意味的要因をあげている。他動詞構文選択の要因として Polinsky & Nedjalkov (1987: 248-250) はさらに、「指示対象の状態の変化」を引き起こすかどうか、つまり角田 (2010: 85) による「被動作性」をあげている。

ここでは語用論的要因の一つとして、「被動作性」について考えてみたい。「つかむ」という行為が完了されていることを示す例 (45) では、動詞が他動詞で、その目的語である人名が絶対格で表わされている。これに対し例 (46) では「つかもうとした（しかしつかみそこなった）」という状況で、動詞が逆受動形で、目的語である「木」は処格で表わされている。つまりチュクチ語同様に、アリュートル語においても被動作性の違いが動詞の形式および名詞項の格標示の違いとして現れることがあると考えられる。逆受動形の「つかむ」が常に被動作性と関連するわけではないが、興味深い例としてここに紹介する。

(45) ənki qəməv-ə-nak *akmin-nin* jattiy-ə-n tilp-ə-jit...
 そこで PSN-E-ERG つかむ-3SG.A>3SG.O PSN-E-ABS.SG 肩-E-CONT
 「そこでQ男はJ男の肩をつかんで...」 (Kibrik et al. 2004: Text 41 Fight.008)

(46) jattiy-ə-n janut *in-akmit-i* utt-ə-k ajevaq
 PSN-E-ABS.SG まず ANTI-つかむ-3SG.S.PFV 木-E-LOC しかし
 pəkav-nin utt-ə-?ut t-akmin-ŋ-ə-k
 しそこなう-3SG.A>3SG.O 木-E-RDP (ABS.SG) WANT-つかむ-WANT-E-INF
 「J男はまず茂みをつかもうとしたが、つかみそこなった」 (Kibrik et al. 2004: Text 41 Fight.009)

5. まとめ

本稿ではアリュートル語の名詞項標示について論じ、以下の点を明らかにした。しかし本稿では文の情報構造については検証することができなかった。今後の課題としたい。

- (47) a. 自動詞文においてOに相当する名詞項を具格・与格・処格・沿格のいずれかで示しうる。
 b. a の名詞項の格の選択はその名詞項の意味的特性と関連している（無生物、人をあらわす名詞、場所をあらわす名詞）。
 c. 自他の選択には名詞項の意味的特性や語用論的要因などの複合的な要因が関連する。
 d. 自他両用動詞は接辞による動詞結合価の増加をしにくいという点で抱合や逆受動と共通する。

略号一覧

A	他動詞主語	INV	反転	RDP	重綴
ABS	絶対格	IPFV	不完了	S	自動詞主語
ANTI	逆受動	LOC	処格	SG	単数
CAUS	使役	O	他動詞目的語	RES	結果相
CONT	接触格	OPT	願望法	1	1人称
CSL	原因格	PFV	完了	2	2人称
DAT	与格	PL	複数	3	3人称
E	挿入音	PLUR	複数化	()	非明示の要素
ERG	能格	POSS	所有	-	形態素境界
INF	不定形	PROL	沿格	=	クリティック境界
INS	具格	PSN	人名		

参考文献

- Dunn, Michael. 1999. *A Grammar of Chukchi*. Unpublished Australian National University Ph.D. dissertation.
- Kibrik, A. E, S. V. Kodzasov, I. A. Muravyova. 2004. *Language and Folklore of the Alutor people* (ELPR publication series A-042). Osaka Gakuin University.
- Letuchiy, Alexander. 2009. Toward a Typology of Labile Verbs. In: Epps, Patricia and Alexandre Arkhipov. (eds.) *New Challenges in Typology: Transcending the Borders and Refining the Distinctions*. New York: Mouton de Gruyter: 247-268.
- 2010. Lability and Spotaneity. In: Brandt, Patrick and Marco Garcia García (eds.) *Transitivity: Form, Meaning, Acquisition, and Processing*. Amsterdam: John Benjamins Publishing: 237-255.
- Mal'tseva, A. A. 1998. *Morfologiia glagola v aliutorskom iazyke* [Verb Morphology of the Alutor language], Sibirskaia Khronograf.
- Mithun, Marianne. 1984. The evolution of noun incorporation. *Language* 60: 847-894.
- Nedjalkov, Vladimir. 1979. Degrees of Ergativity in Chukchee. In: Frans Plank (ed.) *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*. Academic Press: 241-262.
- Polinsky, Maria and Nedjalkov, Vladimir. 1987. Contrasting the Absolutive in Chukchee: Syntax, Semantics and Pragmatics. *Lingua* 71: 239-269.
- Sapir, Edward. 1911. The Problem of Noun Incorporation in American Languages. *American Anthropologist* Vol.13 (2): 250-282.
- 角田太作 2009. 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』 東京, くろしお出版.

Core Argument Marking in Alutor

Yukari NAGAYAMA
(Hokkaido University)

This paper aims to describe and exemplify the general characteristics of core argument marking for transitive and intransitive verbs as compared to that for labile verbs in Alutor (Chukchi-Kamchatkan, North-East Siberia) from the viewpoint of differential object marking (DOM).

Alutor is an ergative-absolutive language that exhibits a strict core argument marking system: intransitive subject (S) and transitive object (O) take the absolutive case, while transitive agent (A) takes the ergative case. In this regard, this language is not a typical DOM language. However, it has a DOM-like feature: a semantic object can be represented as a transitive object or as a peripheral argument (instrumental / locative / dative / prolativ) of an intransitive verb.

Moreover, Alutor distinguish transitive and intransitive verbs clearly, showing different inflectional patterns in the affixes for each group. The majority of verbs can take either one of them, but this valency changing requires certain morphological operations, such as adding an antipassive or causative affix or incorporating a nominal argument. In contrast, there are a certain number of labile verbs that can take both types of inflectional affix without any morphological operation. The choice between intransitive and transitive use of labile verbs, however, shares the same problems as valency changing in transitive and intransitive verbs. I show that transitive/intransitive alternation for all Alutor verbs has multiple causes, including the semantic and pragmatic properties of a nominal argument and a verb in the language.

(ながやま・ゆかり nagayama@let.hokudai.ac.jp)